

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部・社会福祉学科
石田 和男

作成日 2023年1月10日

1. 教育の責務

2015年（平成27年）度から弘前学院大学社会福祉学部・社会福祉学科に採用され、8年になる。主に哲学を中心に、講義、演習科目を担当している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
基礎演習1	1年	講義	通年	小論文、読む、書く、話す
哲学A	2年	講義	前期	哲学の始まり
哲学B	2年	講義	後期	近代哲学の誕生と発展
歴史と社会A	1年	講義	前期	ノーベル平和賞受賞者
歴史と社会B	1年	講義	後期	ノーベル平和賞受賞者
専門演習1	3年	演習	通年	動物性、動物倫理、環境論
生涯福祉特論	院1年	講義	前期	自閉症、PTSD、可塑性

2. 教育の理念

21世紀に生きる我々は、おびただしい量の情報の中に生きている。多様な価値を前にしてたじろぐことすらあるくらいだ。そんな中で、自らのアイデンティティーを保つには、今という時を感じる事が大切である。そのためには立ち止まることだ。立ち止まり、できるだけ長く今を感じよう。今が紡ぎ出す豊かな味わいを感じ取ろう。今という時はそれだけで満ち足りた気持ちにさせてくれる。ありふれているが、すばらしい今を生きていることを教えてくれる。大切なのは、日常の何気ない書物に目をとめて、そこから何かを感じ取ろうとする姿勢である。周囲に目を開こうとする姿勢である。

1. 基礎演習1の場合

小論文の書くにあたって、基本的な考え方として、普段から、人の話を聞くこと、人と親しく話しあうこと、普段から本をよく読むことである。次に、技術論としては、自分の身体をよく用いて、各機能をよく活動させること；呼吸法、発声法、イメージ作成法、フェルトセンス開発法などの訓練。各主題を対象にそれらを機能的に統合し、生かしていくことが大切。

2. 歴史と社会Aの場合

ノーベル平和賞受賞者の生涯の記憶をたどりながら、どのように本人が平和のために貢献しようと思うようになったのか、検討する。各時代の戦争状態に応じて、受賞者が何を目指して学び、社会的な活動をしたのか、それぞれ民族、宗教、歴史の違いから平和形成に関心を持ったのか、そのターニングポイントはどこか、そして平和賞受賞理由、受賞後の社会的影響について学ぶ。

3. 教育の方法

1. 基礎演習1の場合

論文の書き方について、テキストに従って検討を加える。クラスを3グループに分けて実際に作業をする。まずはテーマに関する問題の場を決定；トピックを選ぶ。次に図書館の目録をデータから引き出す。準備段階として文献カードと参考図書目録を作成。次に、データ作り；内容、目的、ドキュメント。下書き；幹線のわかるような構造を構築する。清書；注と文献表も作る。次に小論文の書き方も検討する；アイデアを整理する。本お読み方を検討、書くときになるべくわかりやすく書くために話し言葉を用いる。後期にはアランの『幸福論』を読む；グループごとに声に出して読み、解釈を加え、それらをまとめ一つの感想文を書き、みんなの前で公表する。

2. 歴史と社会の場合

各時代の戦争状況の中で、受賞者が平和についてどのような過程で関心を持ったか、どのような教育課程を経たか。どんな仕事に就いたか、ターニングポイントを探る。そして、実際に平和活動を実践していったか、それに対する社会的評価はどのようなものか。そしてノーベル平和賞選考委員会の受賞理由について学ぶ。最後にその語の影響についても検討を加える。事にグループごとに図書館などでの勉強が大切である。グループごとに発表する。そのあとディスカッションを行う。そのあと小テストを行う。

4. 教育の成果

評価について、基礎演習1の「授業評価アンケート」結果を踏まえて記す。

1. 「学生自身の自己評価」に関して
 - 1-1. 「シラバスに記されている到達目標や評価方法を読んで知っている」が学部・全学平均より高かった。
 - 1-2. 「事前学修（予習）・事後学修（復習）に取り組んでいる」は学部・全学平均と同じだった。
2. 「授業担当者に関する評価」に関して
 - 2-1. 「提出したレポートや課題をチェックして学生に返し授業の理解に役立てようとしている」が学部・全学平均より高かった。
 - 2-2. 「話し方・言葉は聞き取りやすい」は学部・全学平均より高かった。
 - 2-3. 「学生の質問や意見に適切に対応している」は学部・全学平均より高かった。
3. 「授業内容に対する評価」に関して
 - 3-1. 「教科書、資料（ビデオ、スライド、プリント等）、板書は授業内容の理解に役立っている」は学部・全学平均と同じであった。
 - 3-2. 「この授業から、新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができる」は学部平均と同じだった、また全学平均より高かった。
 - 3-3. 「シラバスの起債に沿って展開している」は学部・全学平均より高かった。

5. 教育の改善

上記4の「授業評価アンケート」結果を踏まえて、改善すべき点を期す。

- 1-1. 「到達目標や評価方法について、シラバスの内容について」、もう少し具体的な説明が必要である。
- 1-2. 「事前学習・事後学修について」、シラバスにわかりやすく説明をする必要がある。
- 1-3. 「この授業内容について十分に理解することができている」とはいえないので改善の余地がある。
- 1-4. 「シラバスに記載された到達目標を」達成しているとはいえないので、改善の余地がある。

6. 教育の目標

短期的には、「授業評価アンケート」の結果を踏まえて、授業の方法や不十分な点について改善していく。

中長期的には、学生の就学意欲と事前の学習意欲を高め、学習成果の向上に努めたい。教科書をもっと有効に活用していきたい。必要に応じて補足的なプリントの活用も行っていきたい。

全体的に学生にもっと可視化できる、わかりやすい、興味が増すような授業形態を考えたい。また授業に主体的な取り組みができるような、内容にしていきたい。そのためには、ノン・バーバルな分野の活用、心理療法的な方法を用いながら（エンカウンターの療法）を用いて、持続的な学習意欲向上を目指して授業改善に努めたい。

【資料】

1. シラバス
2. 学生アンケート